

# 住まいいいし新聞

# 大月人物伝 文学青年から政治家へ 志村 哲良

**日本ステンレス工業株式会社**  
発行/日本ステンレス工業株式会社  
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1  
電話=0554-22-2500  
FAX=0554-22-5234  
Vol.143 2011

8月号

志村哲良は、大正十五年四月十五日、父寛、母たつ代の長男として大月町に呱々の声をあげた。

父寛は、当時甲斐絹織の渋谷商店に職を得ていたが、昭和十年独立して、店名を山梨の山と昭和十年から「山十商店」とし、中間問屋として経営に当たるようになつた。

両親共、都留市宝村大幡の出身であつたので、哲良は、大幡で姉繁子と共に祖父母に育てられ、

小中学校は、大月東小学校、都留中学校で学んだ。

哲良は子供の頃、駅前の神宮司さん宅の裏の広場（現駐車場）で、近所の子供達とよく一緒に遊んだ。

遊びの中心は兵隊ごっこ、野球、サッカー等である。また、昔この広場にはサークัสの一団が来た事もあった。

同級生より一段と背の高かった彼は、二年上の上級生とも同等になんでもできた。

ソードには事欠かない  
少年時代であった。  
小学校時代の地域で  
の友人とは長く付き合  
い、「無尽」を毎月十  
八日（東八にちなみ）  
に行い旧交を暖めてい  
たそうである。

猿橋まで行きは走るが、帰りは皆歩き、話をしながら大月迄帰つてしまふものである。

つも教官より往復ビ  
タをもらつたといつ  
いた。

中学生生活は、遠く  
らの友人が寄宿生活  
していく、よく山十  
自宅に泊まり、勉強  
のかたわら父から碁  
習つたり、文学書に

或る時、父は彼を二室に呼び「これから日本の科学の時代が来るだろう。お前は理系に進学せよ。」との父の申し出に驚いた彼は悩んだ末、父の進言を受け入れたのである。



遊びの中心は兵隊ごつである。また、昔この廣場にはサーカスの一団が来た事もあった。同級生より一段と背の高かった彼は、二年上の上級生とも同等になんでもできた。

喧嘩も強かつたようである。こうしたなか、哲良より先輩のある友人は、学徒出陣していつたが、戦後、悲しい事に白木の箱に入つてかえってきた人もいる。

学校が終わると皆急いで家に帰り、カバンを放り投げて廣場に集まつたものである。体が大きく腕白だったでくれ、大将にするので、「哲ちゃん遊んば遊ばないなど、エピ

ソードには事欠かない少年時代であった。

小学校時代の地域での友人とは長く付き合い、「無尽」を毎月十八日（東八にちなみ）に行い旧交を暖めていたそうである。

都留中学に入学するとたゞで、



猿橋まで行きは走るが、帰りは皆歩き、話をしながら大月迄帰つてきるものである。

また、毎年一月になると柔剣道部の全校生徒の寒稽古があつた。朝六時から七時迄の一時間、十日間位であつた。哲良は剣道部に所属していて卒業の頃には二段の腕前になつていた。背の高い彼は、面が得意であった。

都留中学入学の頃は、戦争の足音が高くなり、軍事教練が行われていたが、呑気な哲良はい

夕をもらつたといつて  
いた。

中学生活は、遠く  
らの友人が寄宿生活を  
していて、よく山十の  
自宅に泊まり、勉強の  
のかたわら父から碁を  
習つたり、文学書に親  
しんだり、詩の暗誦を  
し合つたりして樂し  
生活であつたと、懐か  
しんでいたそうであつ  
こうして彼は都留中  
学時代の青春を大いに  
楽しんでいた。今で  
駅前で遊んだ幼き日  
友達が数名元氣で駅前  
で活躍している。

或る時、父は彼を一室に呼び「これから日本は科学の時代が来るだろう。お前は理系に進学せよ。」との父の申し出に驚いた彼は悩んだ末、父の進言を受け入れたのである。当時、大東亜戦争で多くの文系の学生が出陣していく様子から、父は何としても我が子を守りたかったのだろう。今思うと当時その事が知れたら非国民として憲兵に引っ張られた時代であった。

彼は何とか甲府工業専門学校（現山梨大）に入学したが、相変わらずバンカラ学生で母を嘆かせた事も多々あつた様である。

太平洋戦争も末期の様相を呈する中、軍からの動員命令が下り、飛驒の高山で山腹に横穴を掘る重労働を課せられた中で朝鮮人労働者達の過酷な状態に心を痛め、持ち前の義侠心を發揮して配給される煙草や食糧を秘かに持つて行き感謝されたそうである。

終戦となり彼等の暴動には巻き込まれずに無事帰宅出来たと語っていた。

バンカラでありながら彼は大変なロマンチストで、大月の星野奇、後藤昇両先輩が北海道大学に進まれた事に憧れ、昭和二十二年四月、身動き出来ぬ寿司詰めの汽車で二日かかり北の大地に降り立った。

再開されぬ中で母は着物を売り息子に学費を送つてくれた。

後年、哲良と結婚した妻は盆暮には母に着物をプレゼントして喜んで頂いた事が懐かしく思い出される云つてゐる。

哲良は北海道大学で退学の処分を受けてしまい、学問への希求を放棄せざるを得ず、後年この想いを弟令郎に託したと言つて いた。

庫理事長はじめ有志の方達の賛同と在京経済界の身内の者達と共に、富士北麓開発に挑んだのである。

式会社は更に後五十年に向かって躍進する事であろう。後継者は二男の和也である。

昭和四十年志村寛は二代目大月市長に選出され、哲良は昭和五十八年より参議院議員を十二年間、

術部会長尾身幸次と共に他党との連携で科学技術基本法を平成七年上呈可決し、科学を志す人々への大きな窓口ができた。

参議院議員を二期務めた哲良はその後、富士觀光開発の仕事に専念してい

される煙草や食糧を秘かに持つて行き感謝された  
そうである。

地質学部での学問の中  
で哲良は化石への憧れ深  
く、掘った化石を月光に  
かざし、その成因の遙け  
さに感動していた様であ  
る。

父としての葛藤の中から、  
父の提唱した郡内織物の  
経済的突破口を中国に求  
め、国交回復していな  
かつた状態の中で貿易の  
糸口を見出すべく、中国

があるからには必ず水があると確信し、多くの困難にめげず地下五十七mの岩盤下からの清らかな伏流水を発掘した時の喜びは今でも胸躍るもののが

員という事で昭和六十一  
年科学技術政務次官に就  
任し、予算獲得の為、地  
元山梨出身の金丸信（当  
時副総理）に日本の将来

たが一年後の平成十二年十一月九日、肺炎のため死去享年七十四歳であった。菩提寺は宝の廣教寺であり今は両親とともにこの地に静かに眠つてい

彼は大変なロマンチストで、大月の星野奇、後藤昇両先輩が北海道大学に進まれた事に憧れ、昭和二十二年四月、身動き出 来ぬ寿司詰めの汽車で二日かかり北の大地に降り立った。

では『赤狩旋風』が起こり多くの進歩的政治家、学者、文化人が槍玉に挙げられ、その流れが日本の大学にも及んだ。

当時、G H Q から派遣されたイールズ博士の講演を契機に『学問の自由を

たが中国側の突然の破棄により残念ながら失敗の一痛手を負った。

折しも経済の成長期に入り、父は何としても郡内の経済の拡大を願い、着眼したのが『富士山』であつた。

以来、『水にはじまる物語』と書かれた彼の絶筆を眺めながら、五十年前には予想だにしなかつたことである。この地域の開発による父の願いであつた経済の発展、地域雇用拡大による人々の安

甲斐あつて、満額を貰い、  
そのおかげで世界に誇る  
海底探査船『深海六五〇  
』と人工気象衛星『桃  
一号』を完成させ、科学  
技術庁の人々の喜びを我  
が事のように喜んでいた  
そうである。

資料提供 親族  
協力者 山口 善久  
天野平八郎

守れ』と全学が主張し、

地元の和光政雄信用金

定など、富士觀光開発株

その後、自民党科学技

以来、『水にはじまる物語』と書かれた彼の絶筆を眺めながら、五十年前には予想だにしなかつたことである。この地域の開発による父の願いであつた経済の発展、地域雇用拡大による人々の安

甲斐あつて、満額を貰い、  
そのおかげで世界に誇る  
海底探査船『深海六五〇  
』と人工気象衛星『桃  
一号』を完成させ、科学  
技術庁の人々の喜びを我  
が事のように喜んでいた  
そうである。

資料提供 親族  
協力者 山口 善久  
天野平八郎